

考古資料に基づく大和王権成立過程の一考察

—日本古代史研究への問題提議—

秋月 耀

1. 初めに

日本古代史の研究においても、他の時代史と同様に、歴史学の基本である普遍的な人間社会の本質を探究することは欠かせない。日本古代史の核心は、大和王権成立の状況を究明することである。それは分立した地域を統一し、集団を糾合し、政治権力を形成・確立する過程である。これに不可欠な要件が祭祀と軍事力である。

日本列島では、多くの貴重な考古資料が残存する。これらを検証することにより、当時の状況を解明する手掛かりとすることが必要である。

もっとも、当時の考古資料の年代を測定する科学的な方法は未だ確立していない。このため、古代史の分野では、信頼性のある絶対年代の設定は極めて難しい。絶対年代を引用することは控えざるを得ない。

また、文献、神話・伝説等も古代史研究の対象である。ただし、これらには編纂者等の主観的意図が当然入り込んでいる。したがって、考古資料等と相互検証し、総合的に分析・評価することが基本である。物的補強資料抜きでは、結果的に、先入観、結論先にありき、良いところ取り、牽強付会を排除することは難しい。狭義の「文献批判」以前の問題であり、一般ビジネスと同様、総合的分析判断に基づく蓋然性を追求することが求められる。

本稿では、このような視点から、考古学資料等を再検証し、日本古代史研究への問題提議とした。

2. 祭祀と考古資料

(1) 権力と祭祀

当時の祭祀は、従来、専ら、信仰または宗教上の問題として多くが論じられてきた。「祭」、祖霊信仰、首長霊信仰等が主要論点である。祭器・墳丘墓の形状が研究されてきた。

だが、大和王権の成立は権力確立の過程である。政治権力は支配の正当性と強制力を必要とする。これを具現するものが祭祀と軍事力である。古代では、統一した祭祀と先進的武器である。日本列島では、これを象徴するものが青銅製祭器と墳丘墓であり、鉄製武器である。

権力論的視点から見れば、祭器は権力を象徴する。その意味では、威信財でもある。

その製造は権力と一体である。祭器は単なる地域間の交流・通商、人の移動・移住だけでは拡散しない。土器等の生活用具とは異なる。

祭具の変更・移動・拡散は政治権力闘争と一体である。祭具の変更は祭祀の変更であり、権力の移行転換を意味する。その移動・拡散は祭祀様式の拡大を意味する。祭祀様式の拡大は権力の拡大、即ち、支配領域、あるいは、勢力圏の拡大を意味する。

これらを手掛かりとして当時の権力者等や社会の動向を究明することが求められる。

(2)青銅器

青銅器は朝鮮半島から北部九州に伝えられた。銅剣・銅矛・銅戈等の武器類、鉞・鑿・斧等の工具や銅鏡等である。やがて、それらの生産が北部九州を中心に展開された。青銅器の製造を示す石製鑄型が多く出土している。

青銅器製造の技術と素材は、各地の集団が任意に入手することはあり得ない。高度技術の蓄積と当初は海外に依存した素材とがなければ不可能である。この点からも、権力と一体である。

青銅器と鉄器は到来した時期的な差が少ない。このため、銅剣が戦場で使用されていた時期は比較的短い。青銅器は、専ら祭祀用祭器、あるいは、威信財であった。したがって、出土する際、他の同伴物は少ない。このため、年代を特定し、新旧関係を判定することは難しい。まして、出土状況のみで、地域間相互の関係を確定することは不可能に近い。

銅鐸

(概要)

銅鐸は、弥生時代から古墳時代の始まるまでの数世紀に亘って使用された。使用開始の推定年代には、紀元前3世紀から紀元前後までと三百年以上の違いがある。小型の銅鐸が半島でも多く出土

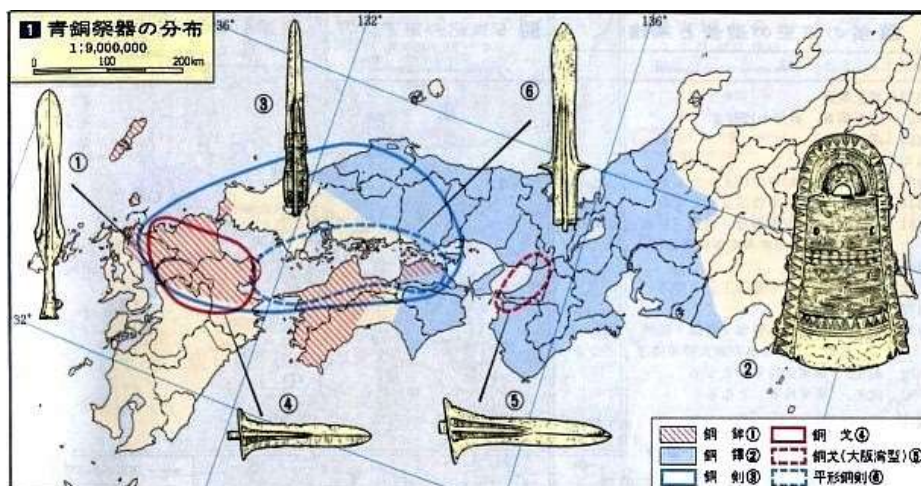


中国・戦国時代初期(BC6C)の諸侯の墳墓から出土した編鐘-湖北省
人民中国インターネット版 2011年3月2日

している。当初、北九州に伝えられ、製作が開始された。多くの鑄型が出土する。近年、北九州(吉野ヶ里等)でも多くの銅鐸と鑄型が出土している。出雲(加茂岩倉遺跡)では、北九州の鑄型から鑄造された銅鐸が出土した。

銅鐸は出雲を中心に普及した。出雲(荒神谷、加茂岩倉遺跡)と同范関係の銅鐸も各地で出土している。そして、銅鐸を使用する地域は西から東へと拡大した。これに伴い多様化し、最盛期には大型化した。終末期には、近畿・三遠地方で特徴のある形式が広まった。

畿内で生産されたものが畿内一帯を中心に遠江から山陰地方に分布する。濃尾平野で生産され、信濃から伊勢湾、京都府北部日本海岸に分布する。



山川出版社「日本史総合図録」1985

銅鐸の中心は

出雲から畿内に移った。そして、出雲、近畿等では、ほぼ同時期に消滅した。形式を問わず、破棄、埋納され、あるいは破壊され、さらには、銅鏡に再利用された。同時期に、大和で前方後円墳の築造が始まり、銅鏡が副葬された。

(検証)

銅鐸の起源については、北方の遊牧・牧畜民が使用した馬鈴とする旧説も存在した。だが、当時の「倭人」は、半島方面に先住し、また、日本列島の「倭人」も、頻繁に往復していた。彼らは、家畜用に使用されていたものを祭器に転用したということになる。合理的な根拠は見出し難い。

むしろ、銅鐸は春秋戦国時代、長江流域で使用された「罍」や「銅鑊」に酷似している。「罍」は、重要な儀式で使われる、大きさの違う楽器を並べ音楽を奏でる「編鐘」を構成した。「銅鑊」は叩いて音を出す軍楽器で、味方を鼓舞し敵を威嚇した。

銅鐸の分布状況により、当時の政治権力の動向を窺い知ることができる。

旧説では、銅鐸が畿内を中心に、銅矛銅劍が九州地方を中心に、分布するとみられていた。その上で、銅鐸文化圏と銅矛銅劍文化圏とが対峙する政治圏とされた。後者が前者を征服し、畿内地方を中心として統一国家を樹立したとも論じられた。だが、近年の考古資料によれば、銅鐸、銅劍・銅矛共に北九州から出雲以東に伝わったことは明らかになった。

出雲では、明らかに銅鐸が祭器として使用された。銅鐸を使用する祭祀を奉ずる一定の政治権力が確立していたことを示す。

出雲が銅鐸祭祀を受け入れた際の状況は定かではない。

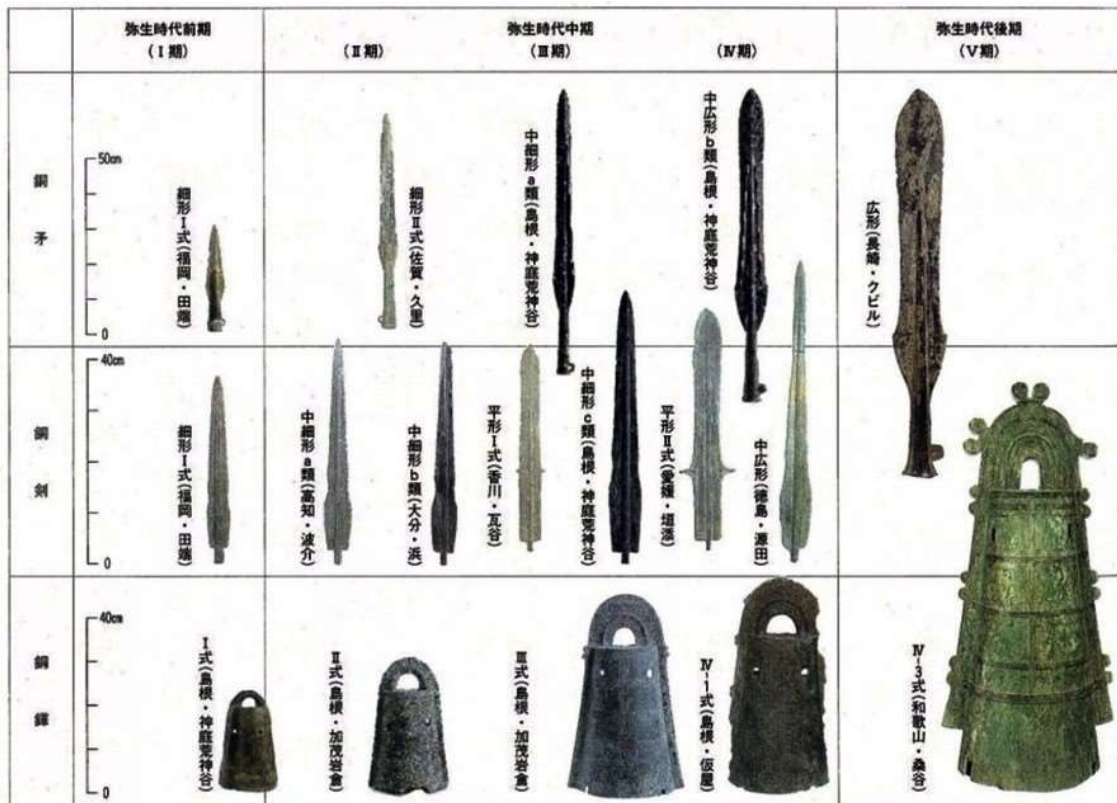
- ・出雲の一部勢力が、独自に銅鐸を祭器として使用し始めた。
- ・北九州の一部勢力が出雲に移動・移住し、銅鐸を使用する祭祀を開始した。

•いずれも、先住者により他の祭祀が執り行われていた場合、政治権力の移行・転換が生じた。
後者の場合、北九州勢力による出雲の征服を意味する。

その後、銅鐸は、出雲、畿内、中部・北陸等広域に広がった。これらの地域が出雲勢力の支配領域あるいは勢力圏と言える。この過程で、各地域では政治権力の移行・転換も行われた。出雲で出土した多数の銅鐸は初期型である。だが、銅鐸地域の東方への拡大に伴い、大型化・多様化した。出雲勢力の東方進出に伴い、勢力の主力が移動したことを意味する。

他方、北九州は銅鐸を使用していない。これらの地域は、この間、北九州と祭祀を異にした。両者に地域的・政治的一体性は認められない。

銅鐸は、ほぼ同時期に消滅した。埋納され、破壊され、鋳潰され銅鏡に転用された。明らかに銅鐸祭祀の終焉、これと一体の出雲勢力の権力が終焉したことを示す。出雲の加茂岩倉で発見された多数の銅鐸が、荒神谷遺跡の夥しい銅剣共々、象徴している。



『古代出雲文化展 神々の国悠久の遺産』
島根県教育委員会・朝日新聞 1997 より

銅剣・銅矛

(概要)

銅剣・銅矛も、銅鐸と同様、当初、半島から北九州に伝えられた。実戦用の武器であった。同時に、威信財でもあり、貴重品として、有力者の墳墓に副葬された。製造・量産が進むに伴い中型化した。

北九州では、当初、銅剣・銅矛と銅鏡は銅鐸と並存した。爾後、この地域では銅剣・銅矛と銅鏡が重んじられ、銅鐸は衰退した。

銅剣・銅矛は、北九州から、中国・瀬戸内・畿内地域に広まった。銅矛は北部九州で多数が製作された。北九州外の地域でも铸造された。出雲の荒神谷遺跡では、膨大な数の銅剣、多数の銅矛が銅鐸と共に出土した。



荒神谷遺跡 出雲観光協会
公式ホームページ より

(検証)

銅剣・銅矛は、当初、実戦用武器として、銅鐸に先んじて広まった。

やがて、鉄器が普及し、鉄剣が実戦用武器の主流となった。青銅器の銅剣・銅矛は儀式的の祭器として使用された。形状も次第に大型化した。銅矛も同様に、大型化し祭器化した。

北九州の一部の勢力が銅鐸を祭器として使用する祭祀を執り行ったかは定かではない。その場合には、彼らは政治権力闘争に敗れ、この地から放逐され、この地域での銅鐸祭祀が終焉したことになる。

出雲の勢力も、先ず、実戦用武器である銅剣・銅矛を取得し、製造を開始した。爾後、北九州と同様、鉄器の普及に伴い、儀礼用あるいは威信財として使用された。銅剣・銅矛は銅鐸と一定期間並存した。

大型化した銅剣・銅矛は中国地方から畿内の一部の地域にも広まった。これらの地域に、出雲勢力の影響力が浸透していったことを意味する。

北九州と出雲は共に、儀礼用、威信財として、銅剣・銅矛を使用した。他方、祭器としては、銅鏡と銅鐸を使用し、祭祀を異にした。地域的・政治的の一体性は認められない。

なお、出雲の荒神谷遺跡で出土した夥しい(358本)銅剣は整然と配列されていた。敗者の武装解除を想起させる。

銅鏡

(概要)

銅鏡も、当初、大陸からもたらされた。専ら北九州で出土する。やがて、有力者の墳墓に副葬された。副葬された多量の鏡も出土する。製造も開始された。国内最古の鋳型も出土している。

銅鏡の分布は徐々に東方地域に広がった。ところが、畿内・大和では、突然、前方後円(帆立貝型)をなす墳墓に多数の銅鏡の副葬が始められた。これを機に、大和では前方後円墳が築造され、銅鏡が副葬されるようになった。北九州勢力が入手した大陸の銅鏡が、畿内で200年から250年後に副葬されている。ほぼ同時期に、銅鐸が出雲、畿内等で破棄、あるいは、埋納され、消滅した。

(検証)

銅鏡は、主に大陸王朝の漢・魏から北九州にもたらされた。『魏志倭人伝(『倭人伝』)』には、魏皇帝から「倭国女王・卑弥呼」に銅鏡百枚が下賜されたと記述されている。当時、北部九州・玄界灘沿岸の地域では多くの小国家が分立していた。これらの有力者の墳墓には前漢鏡が副葬された。銅鏡は祭具であり威信財であった。

大和で新たに前方後円墳が築造され、銅鏡が副葬された。北九州由来の銅鏡が採用されたことになる。大和伝来の銅鐸は全面的に否定された。大和王権には全く継承されていない。

この祭祀の完全な転換は、権力上の大転換、即ち、旧権力の終焉・崩壊を伴う。銅鐸から銅鏡への転換は、大和の権力を北九州出身の勢力が掌握したことを意味する。爾後、銅鏡は、大和王権の勢力圏拡大に伴い、前方後円墳と相まって、全国に広まった。

(2)墳丘墓と前方後円墳

各地域では、指導者を埋葬する墳丘墓が独自に発達した。大和では前方後円墳が築造され、祭祀が執り行われるようになった。

(概要)

弥生時代中期以降、近畿地方、瀬戸内海沿岸各地で、墳丘墓が営まれ始める。従前より規模の大きく地域毎の特徴が著しい。吉備の双方中円形墳丘墓、出雲・北陸の四隅突出型墳丘墓等が、ほぼ同時期に築造された。これに対し、大和では墳丘墓は極めて少ない。副葬品も殆ど認められない。

ところが、次の時期、先ず、前方後円(帆立貝型)をなす墳墓が築造された。多数の銅鏡が副葬された。さらに、箸墓古墳を始めとする定型の前方後円墳が多数築造され始めた。同時期に、銅剣・銅矛、銅鐸が姿を消した。

(検証)

大和の前方後円墳あるいは前方後円(帆立型)をなす墳墓の築造は、銅鏡と相俟って、新たな祭祀の開始を象徴する。新たな権力が確立された。銅剣・銅矛と銅鐸は、ほぼ同時期に排除された。祭祀の転換が政治権力の移行・転換を示す典型と言える。

前方後円墳では、指導者が埋葬されるとともに、集団の祭祀が執り行われた。その際、銅鏡が祭器として使用された。前方後円墳は、明らかに権力を誇示する舞台装置であった。それまでの各種の大型墳丘墓と同様である。

大和では、さらに、定型的な前方後円墳が築造された。この時期以降、この型の墳墓は、日本列島の広範囲にわたって確認される。それまでの墳丘墓には地域性が見られたが、前方後円墳は全国的な普遍性を有する。九州から東日本にわたり、各地の首長が共通の墳墓祭祀を営むようになった。また、大型の前方後円墳を築造するには膨大な労働力と高度の技術を擁する。大和地方一帯を支配する強大な王権による支配領域が拡大した。

3. 軍事力と考古資料

(1)権力と軍事力

祭具の拡散は支配領域の拡大を意味する。また、祭具の変更は祭祀の変更であり、権力の移行・転換を意味する。いずれの場合も、強制力たる武力と一体である。武力において決定的な要素は最先端の武器の有無と多寡である。

古代、鉄製武器が決定的であった。石鏃や石斧・棍棒では鉄鏃や鉄剣には太刀打ちできない。世界史上、青銅器で武装した集団・国家が鉄製武器で武装した集団・国家を打ち破った例はない。鉄製武器に優る集団が覇権を握った。これは軍事の鉄則である。

(2)鉄製武器

大和王権成立の過程は武力戦闘を伴う。だが、当時の武力戦闘を直接裏付ける考古資料が出土されることは少ない。そもそも、戦傷遺跡等が出土されることは奇跡に近い。当時の戦闘の実相を把握することは不可能に近い。

鉄製武器の生産と鉄生産技術の移転とは、一定の技術者集団が移動・移住した結果である。だが、技術者が任意に支配者から独立して移動・移住することはありえない。

鉄製武器の生産と鉄生産技術は、当時の集団とその支配者にとって、死活的な戦略物資と技術であった。鉄生産技術は、その移転自体が軍事力に直結する。

したがって、技術者集団の動向は服属する権力の動向と一体である。技術の移転は、権力中枢の移動か、支配体制・統治機構自体の崩壊に伴う。大和王権成立の過程においても同様である。

従来に通説では、

- ・北九州は、大陸王朝・漢の権威を後ろ盾に、半島南部の鉄資源の供給ルートを独占していた。
- ・漢の滅亡により、この体制が崩壊。西日本諸国は連合して、鉄をめぐる北九州の覇権を奪い取り、優位が逆転した。
- ・この混乱が、『倭人伝』の「倭国乱」、この「倭国乱」の後、「卑弥呼」が共立され、大和王権に発展したことになる。

だが、漢王朝の崩壊後も、公孫氏・魏・晋が帯方・楽浪郡を引き継ぎ、北九州の「倭国」との関係は維持された。実際、この時点では、北九州の鉄製品の発掘量は圧倒的に優位である。畿内は北九州の優位を逆転していない。また、西日本が大規模戦乱に見舞われた考古学的痕跡は、現時点では見当たらない。「倭国大乱」は西日本全域に及ぶ大規模な戦闘状態ではない。そもそも、世界史上、鉄製武器に勝る集団を、これに劣る集団が軍事的に征圧したことはあり得ない。軍事の鉄則である。

ところが、大陸の統一王朝が崩壊し、大陸と半島では分裂と混乱が続いた。北九州は鉄を安定的に獲得する上で困難に直面した。

もともと、このことは、直ちに大和が有利となり力関係が逆転したことは意味しない。大和が軍事的に北九州に到底対抗できない状況は長らく続いた。大和は北九州を含む他の地域に戦略物資たる鉄の供給を依存していた。

したがって、大和での鉄器生産開始は、軍事的転換点であり、北九州との軍事的力関係逆転の決定的要因であった。これには、生産技術の移転と原材料の確保とが絶対条件となる。

大和への鉄生産技術の移転は技術者集団の移動・移住を意味する。これには、いくつかの場合が考えられる。

- ・北九州と大和の勢力との交渉等により、平和裏に、鉄生産技術者を含む集団が移動・移住。
- ・大和勢力が北九州を政治的支配下、あるいは、勢力下におき、九州から大和に鉄生産技術者を含む集団が移動・移住。
- ・北九州勢力が大和を政治的支配下、あるいは、勢力下におき、鉄生産技術者を含む集団が移動・移住。－この場合が最も実現性が高い。

大和と北九州との軍事的力関係の逆転は、一般論として、次のような場合が成り立つ。

- ・北九州勢が、政治的に、したがって、軍事的に統合されている場合、圧倒的に優位である。他の地域に屈服することはない。畿内・大和勢力は屈服せざるを得ない。北九州勢力の主導下となる。圧倒的に優位な軍事力が背景であれば、大規模な戦闘は不要である。戦闘があったとしても、畿内・纏向地方内とは限らない。主戦場が政治中枢の遠隔地であった例も枚挙に暇がない。

・北九州の政治的統合が崩壊した場合等を背景に、北九州勢の一部から、鉄生産等の先進技術がもたらされることはありうる。この場合には、畿内・大和、あるいは、纏向においては、多少の小競り合いはともかく、大規模な戦闘が勃発するとは限らない。

・さらに、畿内・大和勢が政治的統合を進め、軍事力を蓄積した場合、状況は一変する。政治的に分裂した北九州勢を各個撃破することも十分可能である。

いずれにせよ、鉄をめぐり、両者の力関係が拮抗した場合、緊張関係は昂ずる。

紀元法	9	8	7	6	5	4	3	2	BC.1	A.D.1	2	3	4
時代区分	縄文晩期			前期			中期			後期			古墳前期
弥生土器類編年区分	弥生先I期		弥生I期		弥生II・III期		弥生IV期		弥生V期			古墳前期	
中部九州													
北部九州													
西部瀬戸内													
東部瀬戸内													
畿内													
中部・北陸													
高地性集落時代区分			第1次	第2次	第3次	第4次	第5次						

高地性集落の分布 空白の四世紀の謎より

(3)高地性集落

青銅器、鉄器の拡散状況とは別に、日本列島での武力戦闘を伴う政治的緊張・対立状態を示すものが、高地性集落である。

これらも、構築された年代と各地域の相互関係を明確にすることは難しい。その上で、概ね次のようなことが言える。

(概要)

高地性集落は本州に広く分布し、中国地方西部から畿内中心部、さらに東は関東にも散見される。構築された地域は時期により異なる。大和王権成立過程に関係する地域では、瀬戸内の吉備から大阪湾地域と畿内周辺の地域に集中している。

(検証)

高地性集落は、平地や海に臨む山頂部、斜面に構築された。個々の目的と用途について意見は分かれる。だが、警戒・連絡網、防衛前進基地、逃げ城等防御的軍事目的を有することは明らかである。類似の施設は諸外国にも多い。

高地性集落は一過性の構築物ではない。相当の長期間、おそらく数百年に亘り、海上・地上の交通路を警戒監視する状況が続いたことを示す。つまり、他の地域からの集団が継続的、波状的に移動したことになる。相当期間緊張にわたり武力戦闘を含む緊張関係が続いたことは必至と言える。

また、構築された地域の分布状況等は、北九州から畿内等東方への継続的移動が続いたことを示す。これに伴い、北九州・瀬戸内沿岸・畿内の地域間で、軍事衝突を伴う政治的緊張、対立が続いた。この動きは、さらに、畿内の内陸地域にも及んだ。

5. 各地域の状況と考古資料

考古資料の締めくくり、大和王権成立に関連する主要な地域を概観する。

(1)北九州・筑紫地域

古代、北九州・筑紫地域が日本列島の最先進地であったことは間違いない。

(概要)

北九州は、早くから、大陸・半島ルートで、稲作、金属器等が伝わった。出土した考古資料の量と質は、他の地域とは比較にならない。

日本列島で最初に金属器の使用、製造が始まった。青銅器は祭祀用として、先ず、銅鐸が製造された。次いで、銅剣・銅矛、さらに、銅鏡が使用され、製造された。銅鏡は有力者あるいは首長の墳墓に副葬された。

北九州から出土した鉄製品、特に、鉄鏃等は、圧倒的である。この傾向は、古墳時代開始迄続いた。多くの有力者や首長を埋葬する各種の墳丘墓、甕棺等の墳墓が築造された。他の地域では類を見ない豪華な装飾品、銅鏡、鉄刀等が豊富に副葬されている。

*北九州の主要な弥生遺跡と出土品

福岡県福岡市	吉武・高木遺跡	甕棺、副葬品多数
福岡市	比恵・那珂遺跡	銅剣等青銅器、青銅・ガラス・鉄器製作工房
糸島市	平原遺跡	大型銅鏡、勾玉、管玉、耳飾等装身具(女性用)
糸島市	三雲・井原遺跡 (「伊都国」王墓)	甕棺墓から前漢鏡, ガラス璧, 勾玉, 管玉, 有柄銅剣, 銅矛, 銅戈等多数
春日市	須玖岡本遺跡 (「奴国」王墓)	銅剣・銅矛、銅戈、銅鏡多数、ガラス璧・勾玉・ 管玉
朝倉市	平塚川添遺跡	銅矛・銅鏃・銅鏡・貨泉、管玉
佐賀県吉野ヶ里町	吉野ヶ里遺跡	土器・石器・青銅器(銅剣・銅矛、銅鐸)・鉄器 勾玉・ガラス製管玉等の装飾品

(検証)

北九州では、稠密とも言える環濠集落跡が発掘されている。稲作や鉄製品の普及を背景に、他の地域に先駆けて、集落の統合、小国家の形成さらに統合が進んだ。そして、これに伴い、戦闘が頻発した。玄海灘・響灘沿岸から筑紫・佐賀平野へ、多くの大規模集落遺跡と戦傷遺跡が見られる。

この地域は、大陸文化の玄関口として、金属器などの貴重品や先進的技術がもたらされた。当時の最重要戦略物資であった鉄製品の導入においても、大陸王朝の権威を後ろ盾に、他の地域に対し有利な地位にあった。

当時、北九州が、先進的文化和技術を誇り、他の地域を経済的・軍事的に遥かに凌ぐ力を有していたことは間違いない。

(2)畿内・大和地域

大和地域は後進地域であった。ところが、ある時点から急激な発展を遂げた。

(概要)

大和にも弥生時代の唐古・鍵等の遺跡群が多く存在する。だが、出土した青銅器、鉄器は極めて少ない。交流地域は、吉備以東、特に東方である。北九州との関係は全く認められない。

この大和に、概ね、弥生時代末から古墳時代初め迄、纏向が存続した、当時としては最大級の集落跡である。顕著な特徴として、搬入土器が多い。その搬出地は、これ以前の遺跡と基本的には同様である。ただし、相違点は、出雲系土器の流入が多いことである。出雲地域と大和との関係を意味する。

先端技術であった鉄器・青銅器は極めて少ない。また、遺物に大陸文化の影響は殆どない。大陸との交流の痕跡は皆無に近い。鉄鏃等の武器を含め、鉄器は見つかっていない。

ところが、纏向地域の後葉、鍛冶関連遺物が出土した。北九州と共通する出土品を含む。北九州から先進技術である鉄器生産技術が導入・移転されたことを意味する。

(検証)

このように、纏向をはじめとする大和、畿内は、明らかに文化の遅れた後進地域であった。九州北部とは比較にならない

纏向地域の後葉から鉄器生産が始まる。この地域の勢力が自前の鉄製武器で武装した。

また、殆ど同時期に、前方後円墳が築造され、銅鏡が副葬された。また、銅鐸が廃棄・埋納された。この時点で、祭祀のみならず、文化、軍事面においても、大転換が生じたことになる。これは明らかである。権力の移行・転換は必至である。

(3)中国・出雲地域

出雲の全容は、未だ解明されていない。大和王権成立過程のミッシング・リングとも言える。

(概要)

この地域には、稲作その他が、主として海路北九州から伝播したとみられる。考古資料も多く出土している。

代表的な集落跡が妻木晩田遺跡(鳥取県)である。多数の住居・建物跡、四隅突出型墳丘墓を含む墳丘墓等が確認される。鉄器(農工具・武器)、破鏡等も出土している。

青谷上寺地遺跡(鳥取県)では、多数の土器の他、鉄器・青銅器が出土している。また、多数の人骨が出土し、一部には殺傷痕もみられる。

弥生時代末には、独特の四隅突出型墳丘墓が築造された。日本海側を中心に、北陸地方(福井・石川・富山県)の広域に及ぶ。

(検証)

出雲には一定の政治権力が確立していた。また、荒神谷遺跡の大量の銅剣、多数の四隅突出型墳丘墓等から、相当の経済力が窺える。鉄器等の出土状況は、同時代の和歌山地方より先進的であったことを示している。

この地域の政治的中枢と見做される集落等の遺跡は未だ確認されていない。ただし、前述のとおり、銅鐸、銅剣・銅矛の拡大状況は、出雲勢力が、次第に、畿内・大和を含む東方へ進出したことを示している。

6. 時代背景

最後に、古代史研究に欠かせない基本的な視点として、当時の自然環境と安全保障環境について考察する。当時の自然環境と大陸・半島の情勢は、大和王権成立の過程に密接に関連する。未曾有の極めて厳しい環境の下、集団の生き残りは、指導者達にとって最優先で対処すべき問題であった。

(1)自然環境

古来、異常気象に伴い、多くの国家、文明が滅亡した。181年、ニュージーランド・タウポ火山のカルデラ破局大噴火は、異常気象をもたらした。古代小氷期とも呼ばれる。寒冷化、多雨により、食糧難・飢饉、遊牧民大移動等が続いた。異民族の侵入の末、ローマ帝国が467年滅亡。以後、1000年近く、中世暗黒時代が続いた。東では、漢帝国が黄巾の乱の末、220年滅亡。以後、大陸・半島では、ほぼ400年以上、分裂と混乱が続いた。

日本列島も、この世界的異常気象による深刻な影響は、例外ではない。当時、北九州地域は、稲作の普及に伴い、人口が急増していた。筑紫平野周辺には、高密度で集落が広がっていた。彼らが、低温化や度重なる洪水による生活基盤の壊滅、飢饉、疫病の蔓延により、大打撃を受けたことは確実である。彼らにとって最優先すべきは生き残ることであった。この地域ではいわゆる戦傷遺跡が顕著である。新たな生活基盤をめぐる戦闘が繰り広げられた。彼らが集団で移動・移住することも必然の結果であった。

当時、畿内、現在の奈良盆地、大阪平野の地域には広大な低湿地が出現していた。極めて魅力的な農耕適地であった。異常気象により大打撃を受けた西方の住民は、流民・難民化し、あるいは、集団で、移動・移住した。彼らが、この地を目指したことは当然である。

(2)安全保障環境-大陸・半島の動向

当時、北九州の「倭人」「倭国」は、大陸王朝に朝貢する関係にあった。彼らは、その権威を後ろ盾に、先進技術・文物、特に、鉄の供給で有利な立場にあった。

三国時代、大陸の魏・呉間の厳しい軍事対立が、半島と列島に波及した。半島では凄惨な殺戮戦が展開された。北九州地域は魏・呉戦略上の要衝と見做された。魏は、「倭国」の内紛に直接軍事介入し、軍事使節団が常駐した。北九州は、極めて緊張した状況に置かれた。北九州の「倭国」あるいは周辺の「倭人」が抱いた危機感は計り知れない。

7. まとめ

以上から考察される大和王権成立過程は概略次のとおりである。

- ・弥生時代終盤、日本列島の住民は異常気象に直面した。集団間では武力抗争も展開された。北九州地方では、これに加えて、大陸・半島の動乱の直接の影響を受け、政治・軍事的にも困難に直面した。彼らの一部は、新天地を求め、東方に段階的・波状的に移動・移住し、逐次、支配領域を拡大した。
- ・中国地の勢力は、独自の政治的支配あるいは影響力を、畿内、中部・北陸等広域に拡大

した。

- ・北九州出身勢力は、やがて畿内に進出し、最終的には大和に定着した。そして、大和王権を樹立した。この過程で、先行した勢力からの権力の移行・転換も行われた。
- ・彼らは大和を中心に、徐々に支配領域を拡大した。

8. 終わりに

『古事記』『日本書紀』の神話の部分は長らく偽書扱いされて来た。大和王権成立の状況は「神武東征」等の神話として記述されている。だが、これらの記述には、考古資料を俯瞰して蓋然性を追求する場合とは抜本的な相違は存在しない。

今後、考古資料、文献、神話・伝説、さらには AI を用いた分析等全ての資料を総合的に分析評価することが求められる。